



社会医療法人財団互惠会 地域医療を支えてきた中核病院 最先端の放射線治療に挑む

70年以上、地域の人々から親しまれてきた大船中央病院を経営。
放射線治療、乳がん、炎症性腸疾患の高度治療技術も持つ。
職員の意識改革を進め、一層の地域密着を図る。

1952年8月に神奈川県鎌倉市で大船中央病院を開院した社会医療法人財団互惠会は、同病院の前身である企業内診療所時代も合わせると、70年以上にわたって地域医療を担ってきた。同市内には大規模な公立病院がないため、市民病院的な役割も期待されてきた。そうした背景と夜間救急医療等での貢献によって、2010年には公益性の高い医療の担い手として「社会医療法人」の認定を受けている。

「当院の特色は地域に根ざした病院

であること。患者さんとの距離感が近く、急性期だけでなく、その後のより長いフォローが可能」と、大船中央病院院長の須藤博氏は説明する。

それに加え、「放射線治療、乳がん治療、IBD(潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患)治療で、全国でも最先端の技術を追求していることが、もう一つの大きな特色だ」(須藤院長)。高度先端医療分野では全国から患者が集まるほどの技術を持つ。

今年3月、同院は新放射線治療室を

オープンさせ、米バリアン社の最新の放射線治療システム「Halcyon」を導入した。Halcyonは、画像誘導システムによる強度変調放射線治療(IMRT)がシンプルな操作で行える装置で、精度の高い効率的な照射によって従来に比べ照射時間を減らすことができる。病巣へ照射を集中させることで、放射線治療による患者の体力の消耗を抑えることができるという。

導入されたHalcyonは国内1号機。同病院は年間800人を超える患者に放



今年3月、米バリアン社の最新型放射線治療システム「Halcyon」の国内1号機を導入(左)。医師と物理士がタッグを組み(右上)、放射線技師が正確に照射位置を決定し(右下)、国内トップクラスの治療を実施している

射線治療を行い、IMRTといわゆるピンポイント放射線治療(SBRT)では全国トップクラスの施行実績がある。さらに多くの患者にIMRT、SBRTを提供するために、今回の導入に至った。

須藤院長は「立派な治療機器を導入だけでは不十分。当院は放射線治療医、物理学の専門家である物理士、実際に治療装置を操作する放射線技師それぞれが最先端の知識と技術を持っているため、機器の性能を引き出した高度な治療ができる」と語る。

物理士とは、物理学の知識をもとに放射線治療の照射プランを検討し、治療装置の精度管理を放射線技師とともに、医師をフォローする役割を担う。多くの病院では医師が照射プランを作成することが多いが、物理士の存在によって、医師はその分の時間や労力を問診や診断に振り向けられる。

「みんなを笑顔に」を理念に 職員の意識を改革

須藤院長が院長に就任したのは3年前の2016年12月。経営的には赤字に転落した年で、院内の雰囲気も良好とはいえなかった。須藤院長がまず行っ

たのが職員へのアンケート調査。400人強の職員のうち、短期間のうちに250人以上が回答を寄せた。職員たちの熱意を感じ「これなら(再建も)大丈夫だと思った」(須藤院長)という。

須藤院長は全職員に経営状況を公開し、人事評価制度の改善などに取り組むとともに、職員を前向きな気持ちにさせるため「みんなを笑顔に」を理念に掲げ、「職員が一番です」と宣言した。病院では患者さんが最優先なのは当たり前。だからあえて、職員が一番と打ち出したのだ。従業員満足度を高めて職員のやる気を喚起し、19年3月期には黒字転換を果たした。「地域に愛される病院として、持続可能であることが何よりも大切。それには黒字経営が必要」と須藤院長は言う。働きがいのある病院を目指して、現在でも「何のために仕事をするのか」を常に職員に対して問いかけているという。

「医療従事者のほとんどは、人の役に立ちたいという気持ちを持っており、それが楽しいから仕事をしているはず」と須藤院長は考える。医療の本質を大切にすることが、同病院を支える根本となっているのだろう。



「職員たちが自主的に、前向きに働ける環境を整えていきたい」と語る、大船中央病院の須藤博院長



地域に親しまれる病院として、病気や健康管理に関する市民講座を定期的で開催している

Corporate Profile

理事長 雨宮 厚
院長 須藤 博
所在地 神奈川県鎌倉市大船6-2-24
開設 1952年8月
売上高 72億円(2019年3月期)
従業員 607人(2019年3月現在、
常勤、非常勤含む)
<https://www.ofunachuohp.net/>



神奈川県鎌倉市にある大船中央病院